

中村 哲先生「アフガンに命の水を」

2016年6月11日、楓の会では、医師の中村哲先生をお迎えして春の講演会を開催しました。今回は、長年にわたりパキスタン・アフガニスタン地域で行っている、医療、水源確保、農業支援などの活動について、「アフガンに命の水を」と題してお話いただきました。

土着化することで診療を継続

活動のきっかけは、1984年パキスタンのペシャワールで行われた「ハンセン病根絶5か年計画」に参加したことです。私の任務はハンセン病治療センターの設立でしたが、患者数2,400名に対して、ベッド数はわずか16床。パンを焼くオーブントースターにガーゼの入った金属のボールを入れ、煙が出かけた頃に取り出す。狐色に焦げていけば消毒済み、白いのは未消毒。こういう状態でした。「モノやお金をもっと必要」ということで、現地活動を支える日本のペシャワール会の活動が活発化し、現在に至っています。

私たちが活動を始めたのはソ連軍侵攻の数年後で、難民キャンプで細々と診療を続けていましたが、大きな転換がありました。“ハンセン病コントロール”自体が先進国側のアイデアであって、実状に即していないと判断したんです。ハンセン病が多いということは同時に他の感染症の巣窟であることが多く、それも山中の貧しい人たちに多い、ということ私たちが知ったのです。そこで、ハンセン病の多発地帯に入って行って、一般的な診療をしながら、ハンセン病を特別扱いせずに感染症の一つとして診る、という方針を打ち出しました。

ソ連軍撤退の後を追うように、アフガニスタンの山岳地帯に診療所を次々と建設していきました。ところが、ハンセン病コントロール達成宣言が出ると、一斉に援助が引き上げられてしまった。話題性がある間はヒトもモノもカネも集まるが、話題性が無くなると嘘のように引いてしまう。でも、私たちは患者を診続けなくてはならない。ハンセン病は、その後のケアまで含め一生に近い付き合いが必要です。「日本からの補給が続く限り、全部は無理でも、この地域の患者だけでも継続して診よう」と自前の病院を建て、現地に土着化することで診療継続できる体制ができたのが1998年でした。

命をつなぐために井戸を再生

体制が整い、「さあ、今から」というときにアフガニスタンを襲ったのが、2000年夏の世紀の大干ばつでした。国民の半数

に相当する1,200万人が被災しました。

当時、私たちの診療所の周りからは村々が次々と消えていきました。つい最近まで栄えていた村が、半年の間に砂漠と化す。そして、子どもが汚い水を口にして赤痢などで死んでいく。水がないということは、飲み水はもちろん、食べ物も採れない。そのために栄養失調になって抵抗力がなくなり、簡単な病気でも死ぬんです。若いお母さんが小さい子を胸に抱いて、時には何日もかけて診療所にやってくる。生きてたどり着くのはまだましで、外来で列をなして待っている間に、子どもが胸の中で冷えていくという姿は、ごく一般的に見られました。

清潔な水、十分な食べ物さえあれば、とりあえず命をつなげられる人たちがいる。そこで、残った住民たちを集めて、枯れた井戸の再生を始めたのが2000年6月でした。その後の5年間で約1,600か所で清潔な飲料水を確保、という大きな仕事に発展しました。

報道と現実の激しい落差

2001年9月10日米国同時多発テロが発生すると、翌日からアフガン報復爆撃しかるべし、という流れが作られました。私たちはそれに反対して、「テロに加担しているのは一部の人間。アフガニスタンに必要なものは、爆弾の雨ではなくて、パンと水である」と主張しました。が、10月に首都カーブル空爆が始まりました。

流された映像は、ほとんどは爆弾を落とす側の映像であって、落とされた側の映像はなかったと思います。実際行われたのは無差別爆撃で、真っ先にやられたのが、お年寄り、子ども、女性、弱い人たち。そうこうするうちに、タリバン政権が倒れました。すると、世界中がまた映像に騙された。当時日本で盛んに流された映像は、「女性を圧迫する極悪非道のタリバン」「自由と正義のアメリカ軍や同盟者を歓呼の声で迎えるアフガン市民の姿」。これが繰り返し流される。そして、アフガン問題は忘れ去られていきました。

実際は何が起きたか。それまで絶滅に近かったケシ畑が、米軍の進駐と共に見事に復活し、数年も経たずアフガニスタンは

世界の麻薬の90%以上を供給する麻薬立国に転落しました。確かに自由はやってきた。麻薬栽培の自由。女性も自由になった。女性が外国兵相手に売春する自由。これは決して言い過ぎではないと思います。

江戸時代の知恵をアフガンに

復興には農業用水が不可欠ということで、カレーズと呼ばれる地下水利用の灌漑設備を復旧していったのですが、干ばつで地下水が枯渇してしまう。そうすると大河川からの取水以外にないという結論になり、河川から水を引く「緑の大地計画」を2003年から開始しました。

計画当初、現地にある道具はつるはしとシャベルだけでした。これには私も面食らいましたが、「業者や技師に頼めば立派なものができるかもしれない。でも誰がメンテナンスするのか。地元の人たちの手で作り、自らメンテナンスし、子孫へ受け継いでいくべきではないのか」と思い直しました。

そしてたどり着いたのが、私の郷里福岡県の筑後川にある江戸時代から稼働している「斜め堰」という古い水利施設でした。建設された220年前はダンプカーも重機もなく人力だったはず。アフガニスタンでもできないことはない、これをコピーすることから始めました。10年後、アフガンに江戸時代の取水堰が完成しました。用水路の壁も江戸時代からある蛇籠。針金の籠の中に石を詰めて重ね、その裏側に柳の木を植えると、根が石の隙間に入ってきて、針金が錆び落ちて、伸びた柳の根が生きた籠となって壁の構造を崩さない。現地にはコンクリートは無くても石が豊富にあります。しかも、アフガン人の農民なら石の積み方に習熟しています。

神の望まれる「和解」と「恵み」を

この十数年を通して、予備軍まで入れると約1,000名の熟練工集団が作られました。現在彼らが中心となり、取水設備の整備が次々と行われ、当初目標の9割近くを達成しています。数年後には1万6,500haを潤し、65万人の人々がここで安心して生きていける農村地帯が復活する予定です。困っている地域は他にもたくさんありますから、熟練工集団をさらに増やし、他地域に展開しようという計画を立てています。“東部穀倉地帯の復活”を目前にして、みんな希望を持って生きています。

私たちはあらゆる勢力と協力しています。「政府だ」「反政府だ」とか、もうそんなことはどうでもいい。「まず手を取り合って生き延びよう」と。次の展開に向けての努力も続けられています。

この三十数年間を振り返って浮かぶキーワードは、「和解」と「恵み」です。私たちは、武器があれば未来を守れるとか、金さえあれば豊かになれるという錯覚に陥りがちです。神は人間に



本当に必要なものをすべてご存じです。それを人間はなかなか発見できていない。争いによって恵みは決して発見できません。人と人はもちろん、人と自然が和解することで、恵みを実感することができ、次の新しい世界が築かれていくのだと私は思っています。我々はどこに行くべきでしょうか。いまの時代こそ、神の恵み、神の望まれる和解が必要ではないでしょうか。◆

会場との質疑応答

医師として脂が乗りきる38歳で、なぜ現地医療に従事しようと考えたのか？

「最初に訪れたのは32歳で山岳隊員としてヒンズークシ山に登ったとき。『こんなところで暮らしながら仕事をしたい』と思っていたら、ペシャワール行きの話が来た。『あそこだったら』という軽い気持ちで受けたのがきっかけです。我々クリスチャンには便利な言葉があって、『そこに召された』と理解いただければ(笑)」

現地で受け入れられるために必要なことは？

「基本は、『その人が何を欲しているのかを知る』『危険な仕事ほど先頭に立ってやる』です。これができれば、たいていの人は付いて来ると私は思います」

英和でも国際貢献や国際協力という志を持つ生徒は多いが、どのような能力や資質が大事か？

「いかに相手の話をよく聞き、相手の気持ちをよく理解するか、だと思います。志が尊くても、我々はいち独りよがりになりがちです。単に理解するのではなく、自分に対する謙虚さも必要です」

※この内容は当日の録音テープを元に一部割愛・再編集したダイジェスト版です。

■ Profile

中村 哲氏

1946年9月15日、福岡県生まれ。73年九州大学医学部卒業。国立肥前療養所、大牟田労災病院、馬場病院を経て、84年パキスタン・ペシャワールでハンセン病診療を開始。ミッション病院ハンセン病棟医長、ジャパン・アフガン・メディカルサービス顧問、ペシャワール・レプロシー・サービス病院院長、ペシャワール会医療サービス病院総院長を歴任。現在、ピース・ジャパン・メディカルサービス(平和医療団・日本)総院長。